

美悠と僕の夏の日

これは僕がまだ幼かったころに経験した、甘酸っぱくてとても淫靡なひと夏の性の目覚めの思い出話だ。

夏休みに入って少し経った頃、僕は家庭の事情で母方の祖母の家に単身で遊びに行くことになった。

別にそれほど深刻なことがあったわけじゃない。単に両親が仕事の都合で、何日も家を空けなければならなくなっただけのことだ。そしてどうせなら、と言うことで田舎にある祖母の家に遊びに行くことになった。

僕にとってもそれは丁度よかった。同年代の友達と少しの間離れるのは残念だったけど、彼等も彼等で旅行に行ったりと予定があったようだし、子供心にどうせなら夏休みの間に何か一つ、大きな冒険でもしてみたいと思っていたからだ。

もっともそれが僕にとっては、ある意味では忘れられない大冒険になるとは想像もしていなかったわけではあるが。

車に揺られること数時間。祖母の家は当時僕が暮らしていた場所から比べても驚くほど田舎にあった。周りを走っている車の数が次第に減っていき、背の高い建物もなくなっ

いく。気づけば周囲には畑や田んぼが広がっていて、遠くを見れば真っ青な夏の空の下に森や山が見える。

母親の「おばあちゃんに迷惑を掛けないようにね」と言うありがちな言葉に適当に返事に返事をする。

しばらくの間なんてことのない会話をしていると、不意に母がこんなことを言った。

「そう言えば、美悠ちゃんとも久しぶりよね」

「そうかも」

などとよくわからない返しをしたのは、僕が少なからず動揺していたからに違いない。

松山美悠（ひやま みゆ）は僕の遠い親戚にあたる女の子だ。年齢は一つ下で、親戚同士の集まりの際には一緒に遊んでいたことを覚えている。当時からとても可愛くて、多分クラスの女の子と比べても、一番だと心の中で密かに思っていた。

彼女の家庭は色々複雑らしく、祖母の家にずっと預けられている。その辺りの事情は、子供だった僕には詳しく説明はされていない。ただ父からも、美悠には優しくしてやれと言われていたのをよく覚えている。

ちゃんとその言いつけを守っていたということもあってか、美悠は僕によく懐いてくれていた。最後に会った時も、僕と別れるのが嫌で泣いていた。

「昨日電話したら美悠ちゃん、あんたと遊ぶの楽しみにしてるみたいよ」

「へえ」

内心ではとても嬉しかったのだが、僕もそれを表に出すのが恥ずかしいぐらいの年齢だったので、素っ気ない言葉を口にする。

「ちゃんと仲良くしなさいよ。美悠ちゃんは色々大変なんだから」

その辺りの『色々』に関しては割愛する。後で聞いた話だがまあ、大したことではなかった。

そんな話をしていくうちに、目的地に到着したようだった。

数年前に来た祖母の家は記憶の中と殆ど変わりはなく、相変わらずの広さだった。

田舎と言うのは大抵そう言うものなのだろう。庭は母親の車が止めてあってなお、まだまだ走り回るに十分な広さがある。自宅には車一台分の駐車場と、ボール遊びもできないぐらいの広さの庭しかないの、余計に凄く思える。

建物も一階建てだけど広い和風の邸宅に、大きな納屋もある。それ以外にもよくわからない

いものが色々と置いてあって、子供心にこの庭だけでも充分に冒険できそうにすら思えた。母親がエンジンを切って扉を開けるとほぼ同時に、家の引き戸がガラガラと音を立てて開く。

「おお、よく来たねえ」

「母さん、息子をよろしくね」

髪の毛は真っ白で顔は皺だらけ、だけどいつでも優しそうな表情で、実際に一度も怒ったところを見たことがない祖母が僕達を見て笑顔を浮かべながらゆっくりと近付いてきた。「はいはい。わかっとするよ。この子はいいい子だから、大丈夫だよ。ね？」

そう言って僕に顔を向ける。僕も何度も頷いて返した。

「ほらね。さあさ、冷たいもんでも飲みな。この暑さじゃすぐ参っちゃうよ」

そう言って僕と母親を中に案内してくれるが、正直車の中でジュースを飲んでいた僕はそれほど喉が渴いてはいなかった。それよりむしろ、久しぶりに来たこの広々とした田舎に興味津々になっていた。

「僕、ちょっと散歩してきていい？」

実際、大人同士の会話なんて子供にとってはつまらないものだ。祖母もそれを察したのか、快く頷いてくれた。

「いいよ。ただしあんまり遠くに行っちゃだめだよ」

「うん」

「ああそれから」

祖母が玄関の方を見る。今まで気づかなかったが、半開きになった玄関から顔を覗かせるようにしてこっちを見つめている女の子がいた。

「美悠ちゃん。お兄ちゃんに遊んでもらっておいで」

祖母がそう言うのと、美悠がこっちに小走りにやってくる。

久しぶりに会う美悠は、やっぱり想像していた以上の美少女だった。

大きな目に、二つ結びにした黒髪、年相応に細い体。そして僕を見つけると同時に見せてくれた眩しい笑顔。ノースリーブの薄いピンクのワンピースがよく似合っている。

僕は不覚にも、数年ぶりに会うこの女の子を見た瞬間心臓の鼓動が跳ねあがってしまった。

美悠と入れ違いになるようにして母親と祖母は家の中に引っ込んでいき、広い庭には僕と美悠が残された。

「久しぶり、美悠」

「うん、久しぶり、お兄ちゃん！」

美悠は僕のことを変わらずお兄ちゃんと呼んで慕ってくれている。そのことが何よりも嬉しかった。

「どうしよう。何かして遊ぼうか？」

「うん！」

美悠は元氣いっぱい返事をする。

「じゃあ、何する？」

「うーん……」

美悠は首を傾げてしまう。

「美悠は普段何をしてるの？」

「最近は秘密基地！」

「秘密基地？」

美悠がこくこくと頷いた。

「それって僕が行ってもいいの？」

「いいよ！ 美悠と小春ちゃんだけの秘密の場所だから」

そう言うと、美悠は僕の手を掴んで歩き出す。子供の僕の手よりももうちょっと小さい美悠のぷにぷにした手の感触は、僕の心に妙な感情を呼び起こし始めていた。

連れていかれた場所は、意外にもすぐそこだった。

「ここって納屋だよね？」

「納屋？」

どうやら美悠は納屋と言う言葉を知らないようだった。

大きな扉を開けて中に入ると、埃っぽい匂いと共に小さな窓から外の光が差し込んで、何に使うのかもわからない謎の道具達が幾つも転がっているのが見えた。

美悠は既に慣れているのか、それらに足を取られないように器用に避けながら、納屋の奥にある階段へと向かっていく。

どうやら屋根裏部屋のような空間があるようで、僕も美悠の後ろについて階段を上っていく。途中上を見ると、短いスカートから美悠の白いパンツが見えて、どうにも落ち着かない気分になってしまった。

階段を上り切った先にあったのは、狭苦しい空間だった。でも一階とは違ってちゃんと掃除されているようで、埃っぽさはあまりない。床にはクッションが幾つか置かれていて、漫画やお菓子の空き箱も転がっている。

「おばあちゃんが掃除してくれたの！」

「ちゃんとお礼は言った？」

「うん！」

可愛らしく頷く。

「どうぞー」

来客を迎えるために、クッションを差し出してくる。

しかし屋根裏と言うこともあってかこの空間は非常に狭苦しくて、僕と美悠はかなり近い距離で向かい合うことになった。

しかも、正面に座っている彼女が足を崩しているので、僕の視界では眩しい白パンツがちらちらと何度も誘惑してくる。

久々に再開した美悠はあまり変わっていなかったようだが、僕はここ数年で一つ変化したことがある。

それは性への興味だった。友達ともそう言う話をすることも多くなったし、クラスの女子……特に薄着になるこの時期には彼女達を見てはドキドキしたり、ムラムラとした劣情を滾らせていた。

そしてそれは目の前にいる一つ年下の少女に対しても例外ではない。むしろクラスの誰よりも美少女で僕に懐いている美悠に対して、母から彼女の名前が出たときにそんな期待を全く抱かなかったと言えば嘘になる。

「ねえ、お兄ちゃん！」

「どうしたの？」

そう思いながらも、同時に僕は美悠のお兄ちゃんでもある。彼女がそうやって楽しそうに話しかけてくる以上、自分のことだけを優先するわけにはいかない。それを理性と言うのか、単に臆病と言うのかはわからないが。

しばらくの間、美悠と僕は雑談を楽しんでいた。話の内容は学校のことや、今流行っている遊びのこと。アニメや漫画の話などだ。美悠には友人がいるらしく、その子が漫画に詳しいらしい。多分、さつきちよっと名前が出ていた小春ちゃんと言う子なのだろう。

そうやってそれなりに長い間座りながら話していると、不意に美悠が僕に抱き着いてきた。

「お兄ちゃん！」

「どうしたの、美悠？」

僕は努めて冷静を保ってはいたが、内心では心臓が高鳴っていた。どうして彼女が突然こんなことをしてきたのか、全く理解できなかったからだ。

幼い少女の身体は柔らかくて、何処に触れてもぷにゅとした弾力がある。さらさらとした髪が肌に触れればくすぐったいし、汗と女の子特有の甘い香りが交じり合って頭がくら

くらしってくる。

「お兄ちゃんに会ったらいっぱい甘えなさいって、おばあちゃんが言ったの」

「そうなんだ。寂しかったの？」

「うん。兄ちゃんのが大好きだから！」

なんと嬉しい告白だろうか。

その言葉が僕の中のスイッチを入れた。

「僕も美悠のことが大好きだよ」

美悠を胸に抱いたまま、手を伸ばして頭を撫でる。

「ん、ふふっ」

満足そうに目を細める美悠に怪しまれないように、少しずつ手の動きを変えていった。

片手は後頭部から背中へ。もう片方の手は、美悠の肩の辺りを撫でまわしてから次第に脇からワンピースの中へと潜り込ませていく。

「お兄ちゃん、くすぐりたい」

「美悠が急に抱き着いてくるからだよ。くすぐられたくなかったら離れた方がいいよー」

おどけた風に言うと、美悠はそう言う遊びだと判断してくれたようだった。

「離れないもーん！」

そう言って、もつとぎゅつと身体を押し付けてくる。

僕はチャンスと言わんばかりに、ワンピースの中に手を入れて胸の辺りに触れる。

同年代の女の子は少しずつ身体が変わってきて、中にはちよつと胸が膨らんでいる子もいた。彼女達がいつごろからそう言った変化の兆しがあったのかはわからないが、美悠の胸に触れると明らかに男とは違う柔らかさと膨らみを感じられた。

「きゃんっ、お兄ちゃん！ おっぱい触ったあ！」

「く、くすぐってたら手が滑ったんだよ」

そう言いながら、片方の手を脇に添える。

「きゃははははっ！」

美悠はすぐにくすぐったがって、僕に胸を触られたことを忘れたらしい。

そのまましばらく二人でもみ合っている間にすっかり二人とも汗だくになってしまっていた。

「あつーい。もう汗かいちゃった」

「そうだね。脱いじゃえぼ？」

冗談めかしてそう言うのと、意外なことに美悠はにっこりと笑って、

「そうする！」

と、僕のアイデアを受け入れた。

ぐっと上に持ち上げるようにワンピースを脱ぎ捨てる美悠。彼女はブラジャーなどつけていないので、白いパンツと裸の上半身が僕の目の前に現れた。

「み、美悠。本当に脱いじゃったの？」

「だって暑いんだもん」

確かにこの納屋の二階は風通しも悪いし、僕達はお互にくっついていたのでそうなる気持ちはわかるけど。

「恥ずかしくないの？」

「お兄ちゃんなら平気！」

そう言ってさっきと同じように、僕に身体を摺り寄せてくる。

「でも、女の子が男の子の前で裸になっちゃ駄目なんだよ」

僕はあることを思いついて、そう口にした。

「どうして？」

案の定美悠は食いついて、首を傾げる。

「男の子は女の子の裸が好きだから、見せられると触りたくなっちゃうんだ」

「あー！ お兄ちゃんってエッチなんだ！」

くすくすと美悠が笑う。僕は恥ずかしいし否定したかったけど、今は胸の内に湧き上がってきた性欲がそれを押しとどめた。

「そ、そうだよ。美悠が可愛いから、エッチになっちゃうんだ。それが嫌なら早く服を着た方がいいよ」

「えー、うーん……美悠って可愛いんだ」

「とっってもね。クラスにも美悠より可愛い子はいないよ」

そうやって褒めてみるけど、それは別に嘘ではない。本当に美悠は美少女だ。

「嫌じゃないよ」

僕は美悠からその言葉を引き出すことに成功した。

「お兄ちゃんのこと大好きだから、ちょっとぐらいエッチになっても嫌じゃないよ」

「そ、そうなんだ……」

それならと僕は、意を決して美悠の身体に触れる。

彼女の肌は前は白かったけど、今は夏と言うこともあってか健康的な小麦色に日焼けしている。全体的な身体の肉付きは年相応にほっそりしているけど、胸はほんのちよっとだけ膨らみがあってそれがまた僕を惑わせた。

「やあんっ」

胸に手を這わせると、冗談っぽく美悠が笑う。手で軽く抑えられても、僕は半ば無理矢理それを突破して、美悠の胸に触れた。

「うわっ、柔らかい」

「そう？ でもまだべったんこだよ。友達のお姉ちゃんは、もっと大きいおっぱいしてるよ？」

「充分だよ。美悠のおっぱいが可愛くて好きだな」

「えへへっ」

嬉しそうに笑う。

そんな美悠の胸を軽く揉んでみるけど、以前友たちに見せてもらったエッチな本の女の子のように喘ぎ声をあげることにはなかった。

「くすぐりたい」

笑いながら身を振るだけだけど、僕は女の子の胸に触るといふその事実になんか夢中になっていた。

「おっぱいの先っぽ、触ってみていい？」

「いいよー」

ピンク色の乳首は、やっぱり男のものよりもちょっと大きくて可愛らしい。

先端に触れて指先でくりくりと弄ってみても、やはり感じたりとかそう言うことはないらしくて、美悠は不思議そうにしていた。

「美悠はまだおっぱい出ないよ？」

「出るようにマッサージしてるんだよ」

「えー！ 美悠、おっぱい出るようになったの？」

僕はそんな適当なことを言いながら、両手で美悠の乳首を弄る。

「ふう……っ！」

指先でちよつとひっかいた時に、美悠がそんな声を上げたのを僕は見逃さなかった。

「どうしたの？」

「わ、わかんないけど、ちよつとくすぐりたい……ん、ふう……っ！」

かりかり、こりこりと弄り回す。

美悠がちよつと気持ちよさそうに息を吐くだけでなく、次第にその先端が尖ってきていることに気が付いて、僕は更に興奮していた。半ズボンの下では僕のちんこはすっかり固くなっているのだけど、幼い僕はまだそれをどうすればいいのかをよく理解していない。

「お、お兄ちゃん……いつまでするの……？」

気が付いたら、僕は十分以上美悠のおっぱいを弄っていた。流石にちよつと不安に思っ

てきたのか、か細い声でそう尋ねられる。

「あ、ああ。ゴメンね。美悠が可愛いから夢中になっちゃった」

「美悠のおっぱいが可愛いのか？」

「そんな感じ」

適当に言っただけで頭を撫でてあげる。あんまり無理をして嫌がられても仕方がないので、適当なところで抑えておくことにする。

それからまたしばらく雑談をしたり漫画を読んだりしていると、次第に僕のちんこも収まってきた。とは言っても、まだ頭の中では美悠に対するエッチな感情が渦巻いたままだったけど。

「美悠ちゃん！」

下から声がする。どうやら母親と祖母の話し合いが終わったらしい。

「おばあちゃんだ」

「行こうか」

美悠に服を着せて、僕は先に立ってから彼女の手を握ると、笑顔でそれを握り返してきた。

「あ、それから美悠ちゃん。ここで僕とやったことは誰にも言っちゃだめだよ？」

「そうなの？ どうして？」

「大人の遊びだからね。子供がやると怒られちゃうんだ」

「えー、美悠怒られたくない！」

「でしょ？ だったら内緒にしないと」

「わかった！」

無理のある僕の説明だったけど、幼い美悠はそれを疑うことはなかった。

僕達は二人で一緒に下に降り、祖母の家の庭で今から帰宅するという母親を見送ったのだ。